

84 誌上発表

『鍼論』について

山崎 陽子

日本鍼灸研究会

『鍼論』は、江戸末期の文久2年(1862)に序刊された鍼書である。著者の葛西清の字は希夷、号は省斎、「讃藩」すなわち讃岐の藩士である。京都大学富土川文庫所蔵本によれば、外題は「鍼論(附日庸俞穴録)全」で、本論「鍼論」2葉、附論「日庸俞穴録」7葉の二部構成に3つの序文3葉と跋文1葉を加えた、13葉の小冊である。

葛西清が鍼灸の典拠とするところは、「鍼論」冒頭の「鍼道之伝尚矣。其要概見于傷寒論。」や「日庸俞穴録」冒頭の「余用鍼灸也。一以傷寒論為根拠。」によく現れている。『傷寒論』は日本では江戸中期以降、古医方の普及とともに広く読まれるようになった。ただし、幕末に至るまで、鍼灸への顕著な影響の例を見ることはできない。そもそも『傷寒論』の診察の体系と俞穴や刺法を無理なく結びつけることは容易なことではない。その意味で、本書の主張は特異であり、興味深い。

葛西清は先ず鍼の効用を「結を解き、急を救う」ことにあるとする。また古い鍼法では、「経絡を解かず、分数を言わず、ただ証候を弁じ、病勢を詳らかにし、論じて疾病の存するところを得、随ってこれを刺し、以てその治方を助くのみ」と断じる。すなわち「証候」「病勢」「疾病所存」を見るため方法を述べた医書が『傷寒論』であり、薬法と灸法の補助が鍼法の役割であるとする。しかし、これは古い鍼灸の在り方というよりも、江戸中期後半以降に出た比較的新しい言説に、『傷寒論』を重ねた言説というべきである。

附録である「日庸俞穴録」では、親試実験に基づく葛西家家伝の俞穴100穴余のうち、その多くが『素問』『靈樞』に見られ、かつ理解し易く用い易い65穴を挙げて部位と主治を述べ、時に鍼灸や出血に言及している。俞穴は11部位別に、頭面6穴、肩膊3穴、背中行2穴、背二行9穴、背三行4穴、胸腹中行9穴、腹二行5穴、腹三行6穴、側脇2穴、手臂9穴、足脚10穴を挙げている。これを要約すると背部15穴、胸腹部22穴、その他(腹背以外の穴)28穴で、俞穴の所在部位に特定の偏重は見られない。主治は1病證条文に1穴を挙げる例(喘急に天突を使用するなど)は22例、2穴を挙げる例(頭項強痛に風池・風府を使用するなど)は8例、3穴は1例、4穴は3例、5穴は2例である。主治は、百会や身柱、申脈や湧泉など急性病や小児の驚悸に特効穴的に用いるものを除けば、頭面の穴では頭痛や歯牙疼痛、肩膊の穴では肩や首の痛み、背部上部の穴では頭項痛や背痛、咳嗽、哮喘、背部下部の穴では腰痛や腹痛、痔疾などの下焦の病に使われている。腹部の穴では心下痞鞭や腹痛脹満、手の穴では専ら上肢の疼痛、足の穴は下肢の疼痛麻木などに用いられている。施術の面では、鍼灸のいずれにも治効があるとする穴が45穴、出血の指示が委中や尺沢など4穴に見られるが、これら49穴のうち、深く刺すこと禁ずる穴は委中と尺沢を含め8穴に及ぶ。逆に灸のみを指示する穴は身柱や長強、神闕など7穴ある。このほか施術法の指示の無い穴が若干見られる。選穴や主治からみると、『傷寒論』の影響はほとんど感じられず、むしろ局所療法と特効穴療法を組み合わせたような印象が強い。

経絡説に基づかず、常用穴数十穴を選び施術する例は、江戸中期後半以降に見られる傾向で、その最も有名な例は、菅沼周桂の『鍼灸則』(1767)や高田玄達『経験要穴』(1791)である。ただ、こうした常用穴という方法は、新しい試みというよりも、むしろ、十四経理論が浸透する以前の、江戸初期的な鍼灸の在り方である。本書は『傷寒論』の鍼灸における意義を強調するが、実際は江戸期鍼灸が衰退しつつあった江戸期後半に現れた、復古的な系列に属する鍼灸書といえることができる。